

文化

蝦夷地を測る

津和野藩士堀田仁助

〈神英雄〉

〈49〉

堀田仁助は、天体を正しく立てて太陽の陰影を測り、夜理解して地球上での日本の位置を知り、さらに自分たちのいる場所を明らかにしようとしました。このような発想は以前からあった。

古くは、安井算哲（渋川春海）が、昼は一本の木の柱を

緯線を挿入した『日本分野図』を発表した（上杉和央氏『江戸知識人と地図』）。ただし、当時はまだ正しい経度の数値は算出できていなかった。

江戸幕府は各藩が作成した国絵図をつなぎ合わせた日本図を使用していたが、これだと全体が大きくゆがんでしまう。そこで8代將軍・吉宗は、自ら新たな日本地図づくりに乗り出した。1719年に完

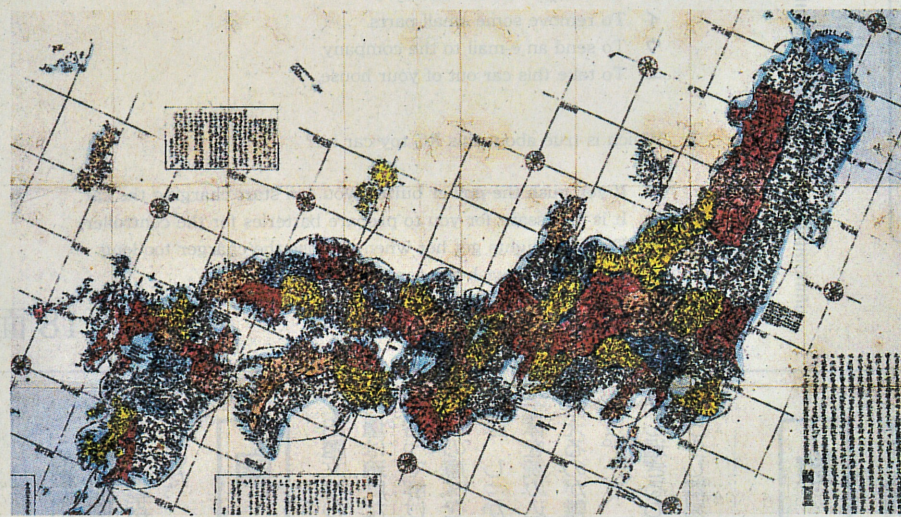
難しい正確な地図作り



『享保日本図』（松浦静山識日本與地図）広島県立歴史博物館守屋壽コレクション、同館提供

堀田仁助以前の地図

成した「享保日本図」は、あ山を定め、周囲の藩の3力を特定することでゆがみを補正した「享保日本図」は、あ山を定め、周囲の藩の3力を特定することでゆがみを補正した地図だった。



長久保赤水『改正日本與地路程全図』茨城県高萩市教育委員会提供

この作業を完遂した建部賢弘は、正確な日本総図作成のために方位測定・天体測量・距離測定の三つを併用して実測する必要を説いたが実現できなかった（川村博忠氏『江戸幕府撰日本総図の研究』）。

長久保赤水は1779年に『改正日本與地路程全図』で、経緯線を記入した日本地図（「赤水図」）を出版した。刊行された日本地図としては国内初のものである。実測図ではないが、内外の地図に自身の体験や見聞を加えて制作した素晴らしい地図だ。国別に色分けされ、主要街道、主要地名とともに、安井算哲の測定成果による緯度を基準にした方格線が引かれている。

同じ頃、広大な蝦夷地では緯度計測が行われた。安永年間（1772-81年）に平沢元愷（旭山）が松前の緯度を調べたとされ、最上徳内も1790年の『蝦夷国風俗人情之沙汰』に経緯線や度数を入れた地図を付けた。さらに徳内に数学を教えた串原正峯（永井正峯）は、自ら考案した簡単な器械で西蝦夷地を測量した数値を残している（高倉新一郎氏『我が国に於ける北海道本島地図の変遷（2）』）。なお、串原の『夷話』の表紙扉に木村玄黄なる人物が測量した緯度が載るが、これは仁助の地図に載る緯度の数値を後世の人物が転載したもの。木村玄黄という名も仁助の門弟の木村一綱の名をもじったものだ。

このように、地図に経緯線を書き込んだり緯度を計測した人物はいいたが、現地でも方位や距離を測定し、緯度を計測して正確な地図を作るまでには至らなかった。（安来市加納美術館前館長）

毎週金曜日掲載